

（左から）三咲順子さんの第6部「迷子椎－三宅島大噴火－」 三咲さんの第7部「グスコーブドリの伝記」



### 女優・三咲順子さんとの出会い

私は消防職員として在職中の2005年から「防災一人語り」を手掛けて現在に至っています（2013年3月末に退職）。火災、救急、救助、消防団や自然災害など、防火防災に係る様々な題材・テーマの作品（脚本）をもとにして、女優や落語家をはじめ、多彩な演技者の皆さんが一人で複数の登場人物を演じるものです。

この「防災一人語り」は、2001年12月18日付の新日本消防新聞に掲載された「おにぎりいっぱいのおにぎり」の愛—痛ましかった保育園児の死」という記事がきっかけで始まりました。それは、「（関西のある都市の）消防本部主催の講習会で、消防隊長が火災事例として紹介し、火遊びで亡くなった幼児の母親の悔恨や消防隊長の無念の思いに、参加した市民が涙ながらに聞き入った」という内容でした。

当時、私はこの記事が消防広報に活用できないかと考えましたが、具体的な表現方法が思いつかずスクラップを保存していました。それから4年後の2005年7月2日、東京都内のイベントに出演した

女優・三咲順子さんがピアノを弾き、歌い、複数の登場人物の声色を巧みに使い分ける、一人語り「子ダヌキのおねがい」を観劇しました。

猟師の罠に捕まった母ダヌキを助けるために子ダヌキが「おじさん、僕を食べてください。そのかわりにお母さんを助けてください」と自分の身を犠牲にしようとしたストーリーで、たぬぎではあるが親子の深い愛情は「おにぎりいっぱいの愛」の記事と通じるものがあり、この表現手法が使えると直感しました。

三咲さんに連絡をとり、記事の劇化の構想を話したところ共感していただき、同年11月11日、北多摩西部消防署主催の防火のついでに「おにぎりいっぱいの愛」の初演を迎えました。

その後、地域の方から防火防災をテーマにしたシリーズものにしてはと勧められ、今では「おにぎり…」を第1部とする第9部までと、第2・第5部の英語版、落語家の川柳つくし師匠が自作自演する防災落語、其の一から其の五までと、其の二の英語版、朗読1作品、合計18の作品があります。

# エッセイ 「防災一人語り」 推進活動

(左から)川柳つくし師匠と寺澤ひろみさんの第8部「レインボウサイン」 つくし師匠とダブルチェロの  
防災落語「セロ弾きのゴーシュ」 ハンナ・グレースさんとダブルチェロの“Ground Zero”



## 様々な出会い

私が消防署長に初めて就任した地域のイベントに誘われ、どんな内容なのかも知らずに参加したのが、三咲順子さんとの出会いです。このような出会いが約13年間の活動で数多くありました。

第1部「おにぎり…」の脚本は、消防署の近くにある高校の演劇部顧問の先生に執筆いただきました。私が校長先生に電話で「演劇部はありますか」と尋ねたところ、「あるどころではなく、うちの演劇部は全国レベルですよ」とのお返事です。

早速高校に伺い、校長先生に脚本の執筆について相談したところ、「わかりました。協力します」とすぐに顧問の先生が呼ばれました。校長先生には2か月ほど前の会合でお会いしていました。弟が卒業した大学の附属高校だったことから、私がお挨拶して名刺を交換させていただいたご縁でした。

別の地域での夜のことです。ある店に私がいたところ、たまたま消防団長が入ってこられたので同席し歓談していました。そこに突然、私よりも先にいらしたご夫婦の奥さんが団長と私の前に来て、「…

亡くなった娘の代わりに私を消防団に入団させてください」と懇願したのです！消防団員だった娘さんが夭折し、3年経ってなんとか気持ちが落ち着き始めたお母さんの決断でした。この場面に私が遭遇したことが、第4部「写真」制作の契機です。

また、三咲さんに続く演技者の川柳つくし師匠と米国人女優のハンナ・グレースさん、ハーモニカ奏者の寺澤ひろみさんやチェロ奏者の中村沙穂さんと宮尾悠さんとの出会いも偶然によるものでした。

川柳つくし師匠が防災落語、其の四「セロ弾きのゴーシュ」を執筆しました。つくし師匠からチェロ奏者を探してと頼まれ思案していたところ、防音扉の細長い縦スリットのガラス窓からチェロと指先が見えたのが、中村沙穂さんとの出会いです。

そうした演技者や演奏者、脚本執筆者と英語翻訳者等は現在20名です。皆さんは公共・公益的な本活動の趣旨に賛同し、「防災一人語り」推進グループのメンバーとして、作品の制作と公演の両面の活動による、防火防災意識の啓発高揚と、災害活動記録の風化防止・伝承を、連携して推進しています。

「防災一人語り」推進グループ代表  
加藤 雅



### 作品に込めた思い

消防団の活動を題材にした第4部「写真」の細部はフィクションです。作品の制作を思い立ちお母さんに取材を申し入れたところ、「取材を受けるまでの気持ちの整理はついていない」とのお返事でした。

「写真」の劇中、母親が亡き娘を思い星空を見上げるシーンがあります。これは、「幼い娘を亡くした時の私の思いを書きました」と涙をぼろぼろ流しながら話した女性消防官と、「母が亡くなった時のことを書かせてもらったわ」と言う喫茶店のママさん、2人の表現を合作したシーンです。

実はこの喫茶店は、消防団員だった娘さんを亡くしたお母さんが消防団長に入団を懇願した時の店です。ママさんとお母さんは古くからの親しい友人で、「娘を亡くした寂しさをまぎらわすためにも、あなたが消防団で活動してみない？人様のためにもなるし」と、ママさんが入団を勧めたそうです。

私はその日、夕方から小学校体育館でのママさんバレーの練習に参加して汗を流し、水分補給のためにこの喫茶店に立ち寄っていました。

### これからも

2005年の初演以来、当グループの自主公演や共催、他の主催者様の要請による公演を合わせて56回(延べ67作品)、すべて参加や入場は無料で開催しています。自主公演の例は、2008年5月28日にカナダ大使館で Just As An Ordinary Family (第2部「ごく普通の家族」英語版)の上演や2014年10月に東北3県で「震災復興支援・東北公演」、各地での「学校公演」などがあります。

「今日は、加藤と申します。よろしければ私どものホームページ『文化と防災の合体』を開いていただけませんか…」と、一面識もない者からの唐突な相談にも関わらず、公演の開催をご快諾いただいている全国各地の皆様、日頃様々なご支援ご協力を賜わっている皆様に、心よりお礼申し上げます。

これからも、防火防災をキーワードに、様々な皆様との出会いとご縁を楽しみにしております。

Website 文化と防災の合体  
<https://www.bousaihitorikatari.jp/>

エッセイ 「防災一人語り」  
推進活動